

サクラソウ園芸品種の保存と地域貢献

筑波大学農林技術センター

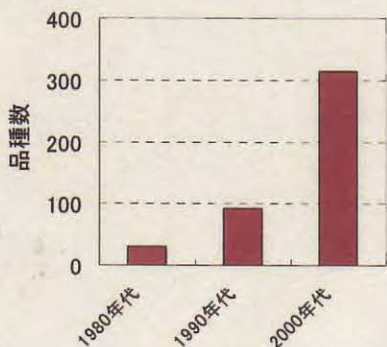
保存活動を行う理由とは？

サクラソウ (*Primula sieboldii*) は、日本全土に広く分布する多年草である。古典園芸植物に分類されており、江戸時代から盛んに品種改良が行われてきた。しかし、このような古典園芸植物は、時間の経過に伴い失われるケースが多く、歴史的な価値だけでなく、将来的な育種の材料として考えた場合、可能な限り現存の品種を保存することが望ましい。

現在の保存状況

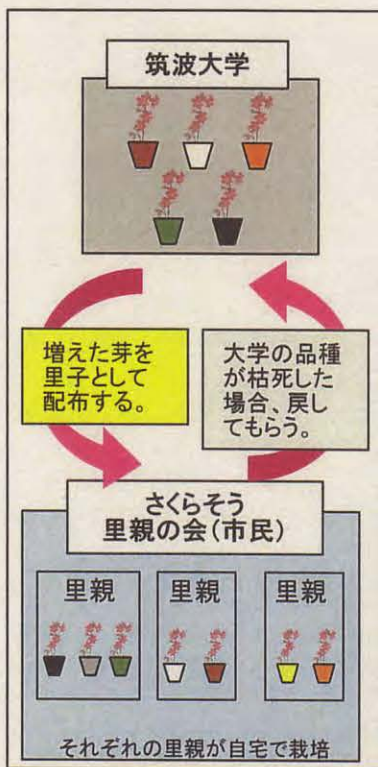
筑波大学農林技術センターでは、開学当時からサクラソウ園芸品種の遺伝資源保存活動を行ってきた。その後、保存系統数は年々増加し、現在では300品種を超える保存数となった。

そこで、貴重な園芸植物遺伝資源であるサクラソウの保存・維持に関する新たな試みとして、2005年2月に筑波大学とNPO法人つくばアーバンガーデニング(TUG)が共同で「さくらそう里親制度」を立ち上げた。



さくらそう里親制度

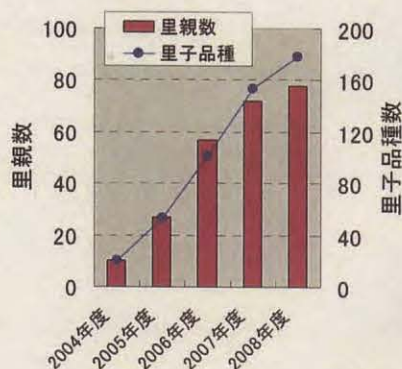
大学が保存している約300品種のサクラソウを市民と共に保存し、大学と市民の二箇所での遺伝資源の保存を行い、コレクション維持の安全性を高める制度として作られた。



芽分け・植付け作業を市民と一緒にすることで遺伝資源保存の大切さや栽培方法などの社会啓蒙活動を行っている。



2004年度の発足当時は、10名の里親に20品種の里子が登録され、その後、里親・里子ともに順調に増加し、現在は78名の里親と178品種の里子が登録されている。



さくらそう展

2006年から(独)国立科学博物館筑波実験植物園との共催で「さくらそう展」を行っている。



「さくらそう展」では、筑波大学が保有している品種と市民が自宅で育てた品種を展示している。展示の機会を設けることで、里親となった市民の栽培に対するモチベーションと品種保存の責任感を維持する効果がある。

さらに、江戸時代からの伝統的鑑賞法である「桜草花壇」を加工・組み立てて、展示をしている。桜草花壇は、サクラソウの花色・花形・咲き方で並べ方の様式(作法)が決められ、日本人独特の花に対する美意識についても紹介している。